
All in my mind

河村 和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

All in my mind

【Nコード】

N7134P

【作者名】

河村 和

【あらすじ】

将来的に避けては通れないであろう問題に直面したある男の、終わり際的一幕。

（前書き）

過去であり、現在であり、未来であり。

現実であり、空想であり。

可能性であり、下らない戯れ言であればいいと思う願いであります。

彼は言った。今世紀最大の犯罪者であり、反逆者であり、英雄であつた。

「まず最初に、私は全ての神々や聖典、誓えと言われるものには全て、誓います。」

国際裁判所の法廷、異例なほど、いや、異例の大規模で行われた初公判の席、そもそも個人のためにこの裁判所が用いられるなど、創設当初は考えもなかったであろう。

その席で彼はそう言い放った。

彼は粛々としていて、狂信者を感じさせる立ち振る舞いであつた。しかし、乱暴な、自らの神のみを信奉する類の、十字軍や、イスラム過激組織を代表とするそれらとは異なつた、むしろ自らの神を全力で否定させるような、弱者、敗者を思わせる慇懃さを、否、彼のその後の発言はまさに、慇懃無礼だつたと言えるのだが、漂わせていたのである。

「私は、全ての神々を肯定しろと言われれば肯定しましょう、しかし、私の思想はまさに狂つていて、絶対に信ずるに値しないものだと、全ての人々に拒否されることを望みます。私のこれからの発言は、この事件の顛末を、真実をただ知りたいと切望される方に限つてのみ、受け取っていただきたいと思います。報道の方に問うのは酷というものですが、私の言葉を吐き気のする邪悪なものだと信じられる方はこの場に残り、仕事を放棄することは出来ないという理由のみでこの場に在籍している方はカメラを回したまま、この場を去ることをお勧めいたします。もし中継を見られている視聴者の皆様におかれましては、好奇心のみからの視聴は気分を害する恐れがありますので、端末のスイッチをオフにして戴くか、チャンネルを変更して戴くことをお勧めします」

彼はそれから時計を注視し、きっかり一分の時間、神に祈るよう

に天を仰ぎ、発言を促された結果、話し始めた。

「まず最初に、私が、世界中の学会、特にサイバネティックに関する分野においてのテロ行為によって、数え切れないほどの人名を奪ったことをここに認めるものです。私はこの事実において、一切の証拠も、証言も求めません。世界の皆様が、証拠や、証言がなければ私を裁けない、そのような事情をお持ちであると思いました故に、犯行後期の現場において、証拠は山ほど残してあったはずですので、この点には問題ないと思われます」

そう、彼は証拠を文字通り、山と残した。精液から毛髪、パスポートに至るまで、彼を二十人ほど組み立てられるのではないかと思うほど大量の証拠を。

しかし、犯行初期、まだその事件が、学会に受け入れられない科学者の犯行であると思われる時点では、実に巧妙に証拠を隠した。幽霊の犯行か、死の霧の再来かと思われたほど、その犯行は鮮やかであった。

彼はサイバネティック、バイオロジー分野を中心に、大量の科学者を虐殺した。国籍、地位、将来性を問わず、学会に出席した科学者のほぼ全てが、墓の下へ送られたのである。それが今回、前代未聞、異例にして、国際裁判所が個人を裁くという事態を招いたのである。

科学者というものは元来、知識の探求には貪欲で、国籍や人種を思考の外に追いやるものである。生命倫理に対する傾注具合に差はあるが、学会などといった知の集積には積極的に集まり、自らを誇示し、また、他者から学ぼうとするのである。その点から、多くの科学者が犠牲になった。

彼は将来有望であるとされる大学などもその虐殺の舞台として選んだため、人的被害は天文学的に跳ね上がり、人類の科学的進歩が二百年は送れたらうとすら言われるほどであった。

「次に、私が犯行に及んだ理由を完結に申し上げます。私は私なりに未来を考えたすえ、科学をある次元で停滞させるか、完全に放棄

するしか、人間として、いえ、人間という個々の精神として、存在することが難しいという結論を得たため、犯行に及んだのです」

彼は思想、信条によって、犯行に及んだ。彼は俗に言えば、英雄気取りの革命家といったところだろうか。しかもそれは、この時点では独善的で、許されざる悪なのである。

「段階を踏んで説明致します。科学者を狙った犯行、それを選び好みせず、大量に虐殺した背景について。繰り返しますが、私は科学の停滞、もしくは衰退、および破棄を目的としていました。この点においては、皆様、疑う余地はないと思われます」

確かに彼は科学の進歩を大きく押しとどめただろう。しかし、我々はその先を知らなければならぬ。彼が犯行に及んだ理由を知り、再発を未然に防がねばならない。

我々は動機の説明を求めた。科学の衰退や破棄を望む理由、彼の発言は未だその真意を語ってはいないのだ。早急な説明を我々は求めた。

「暫く、皆様には退屈な話かもしれませんが、私の動機を理解し、再発の防止に努めて戴くために、これはどうしても、必要なプロセスなのです」

彼はそう言つて、いくらか沈んだような、悲しそうな目をして私を眺めた。

「今日、科学の進歩は目覚ましく、まさに、日進月歩と言えるでしょう。そんな中、カーボンナノチューブ、ダイヤモンド化合物、あるいは磁気流体サスペンションの応用、制御工学の粋を結集し、人体の部分的強化は恐らく、軍事レベルでは常識という段階で実用されているはずです。恐らく、私の夢想などで留まるものではなく、事実として存在すると確信しています」

確かに、関節の自由度やコスト面の問題を除けば、それが実用段階だというのは世界の常識となっている。尤も、それが一般社会に公表されることなど、現段階では考えられないことはあるし、何故、彼はそれを知ることが出来たのかという疑問も残る。

「私は世間に公表されている学説、実用化例の断片から、この事実を推察、確信するに至りました。私は恐怖で震えた、まともに眠れない日々が続きました。そうやって考える内に、事は私だけの問題ではなく、全、精神の尊厳、存在に関わる自由への闘争なのだと、考えるに至ります。細かい、非常に曖昧ですが、いくつかのステップを交えて、説明をさせて戴きます」

彼は大きく頭を下げた。それは王制国家の国民が、王や女王へ頭を垂れ、接吻するような、緩慢で、慈愛に満ちた素振りだった。王室に近い人間ですら、彼ほど、尊敬に満ちることはできないだろう。それに加えて、分け隔て無く誰かを敬愛することが出来るのかと、私は感じる他なかった。

「まず、実現されているであろう事柄について」

彼は語って良いのか迷うような素振りを見せ、二分ほど沈黙したが、誰一人として彼を急かすことはなかった。彼の纏う沈黙が、声を上げる者は等しく愚かなのだと、各々の精神に囁いているようであつたはずだ。それは私に起こった事実であるのだから。

「身体の部分的強化についてです、磁気流体やカーボンナノチューブですが、これらを組み合わせた筋繊維の類似品、義手、義足、そう呼ぶにはあまりに、あまりりに高性能な腕や足ですが、既に実用化されていることでしょう。生体電流による機械制御も実現された今、コンソールやディスプレイは、体に付属する機械を操作するのに必要ではありません。これらは初め、医療機関において、実験と実用の狭間で、データを蓄積するでしょう。やがてより高度な、本来の人間にはなかった、機械的側面をもった部分の操作も付属され、その操作方法を学び、ある意味での進化が起こるでしょう」

彼の言葉はお伽噺や、サイエンスフィクションの脚本でも聴いているかのようなだった。それはエンターテインメントの花形、ハリウッドや、日本、空想的で、夢を求めた結果。早熟すぎて技術が追いつかず、映像としてしか実現されていなかった未来の光景の描写そのものだった。しかし、その場にいた誰もが、彼は単なる夢想家

のテロリストではない、そう確信していただろう。あの場の静寂は今でも憶えている。

「進化が始まり、機械と生物の中間、いえ、まだ、いづらか生物よりな人類は、そう、人類です。まだ人類なのです。が、この電気信号レベルの進化を遂げた人類は、小競り合いを始めるでしょう。場合によっては、もっと大きな戦争が起こる、そう思います。それは各国が技術レベルを確認し終わるまで続くでしょう。現在の自分たちの戦力はどこまで強力になったか、人間でありながらどこまで人間を超越したか、実験を行うはずです」

戦争の火種は表舞台、無能なマスメディアですら嗅ぎつけるほど大きく燦っている。気づいていないのは平和というぬるま湯につかった少数の国だけだ。

核戦争は実際の問題として、余程の馬鹿がスイッチに触れない限り起こりえないだろう。日本を実験場として、また、世界各地の地下核実験場などでも実証されているとおり、放射能の影響は短期的にだが、実害が大きい。半減期の問題もあるが、拡散、埋没させれば生活は可能だ。しかし、世界が貿易によって繋がっている限り、資源が存在する地域を一時的にでも麻痺させることは、自国だけでなく他国の不利益も大きく、国際社会から大きく孤立する恐れがある。各国とも、それは避けたいだろう。ではどうするか、局地的な侵略である。敵国政府をサイボーグによって制圧し、傀儡政権を作り、不自然でない、やはり不自然であるのだが、臨界点を迎えない程度の不自然さで統治することだろう。今日では整形技術の向上や変声機器の発達により、個人を捨ててやることを躊躇しなければ、誰かになりすますことは不可能ではない。愛国者達は躊躇わないだろう。

「そうやっていくつかの、闇の中の侵略が時代を動かし、データをフィードバックし、技術は発展します。身体の一部強化では飽きたらず、全身を強化する人間も現れるでしょう。栄養素は脳を生かすだけのもので十分です。血液供給などは人工心臓によって行われ、

消化器官は擬似的なもので事足りるでしょう。食事という行為は、本能に苔のようにこびりついた、生き物という文化に溶け込む為の擬態的な行動に本質を変化させると思います」

彼の論理は夢物語ではあったが、各国政府からの反応が淡泊すぎたために、私には返って信憑性の高さを思わせるかたちとなった。「しかし、まだ、僕が確信する終末には遠い。この時点までなら、歩みを止めるのに遅すぎる事はないでしょう」

彼はそう言つて、また二分ほど、沈黙した。重苦しい静寂は、かつて神の御使いが言葉を発したときそうであつたように、場を支配した。彼は清廉にして潔白な、死を悼む聖者のようにすら思われた。何万という科学者を虐殺したにも係わらずである。

「次に、起こりうる事態。ここが恐らく、破局点となるでしょう。引き返せる場所、分水嶺、崖の縁で片足を踏み出したような状況です」

彼は少し目が潤んでいた。泣き叫ぶのを必死にこらえた子供のようでもあり、苦しみに耐える静かな青年のようでもあった。

「義手、そこから発展するであろう義体。恐らくこれは一般化されます。先進的な地域から、徐々に波及し、全世界へ広がるでしょう。これは兵器分野では時代遅れの産物と見なされる時期ですが、一般社会において大きな衝撃をもたらすでしょう。兵器開発の分野においては、戦闘用の個体を遠隔操作することによって、様々な戦況に対応しうる兵器が開発されることでしょう。同時にこれは、人が人である必要性の、イデオロギー的損失であると考えられます。なにせ戦車としてでも、人は生きていけるということなのです。科学アレルギーの懐古主義者達は反対運動を起しますが、世代を重ね、適応していく人口は増えるでしょうね。僕はなにも、この懐古主義者達を保護したいというのではありません。問題はもつと先、ずっと未来、といつても、この時点まで来てしまえば避けられないでしょうが。」

彼は胸に手を当て、一呼吸し、何かに誓うように続けた。

「続けます。科学アレルギーの懷古主義者達との闘争のさなか、科学は進歩を続けます。人工知能の開発です。しかしこれはロジカルな部分において、非常に不安定で、危険を提起する声が学会や、開発の内外で起こるはずです。サイエンスフィクションでしばしば取り沙汰されるように、ロボット達が反旗を翻さないとも限らないからです。しかし僕はサイエンスフィクションで多く見られるような、機械としての反乱は起こりえないと確信しています。なぜなら、その行動論理はあくまで論理的で、最終的な決断方法のプログラムは人が行うのですから、自動で書き換える形式のハードを用いない限りは、判断的矛盾によって、人と機械の判断に齟齬が産まれたとしても、強制終了が掛かり、デバグが行われるに留まるでしょう。問題は、人工知能の開発が進み、脳の模倣、義脳、電脳、名称はその時になってみないとわかりませんが、脳の代替部品、それは脳の機能を取捨選択し、洗練された、サイボーグの為の脳と言っても過言ではないでしょうが、人類は辿り着いてしまうでしょう。それが有機的側面を有する可能性をもって、私はバイオロジや、それに類する科学者を殺しました」

彼はその瞬間を思い出した筈だ。彼は泣いていた。科学者は苦まず、死んだだろう。それは死の霧の再来と呼ばれた殺害方法からも明白だ。しかし彼は、その光景を知っているはずだ。悲しみに暮れ、苦しむ親族達、怒りに身を震わせる同胞。各国の関係者が躍りになって彼を捜して、殺そうとした、そしてその理由を、説明を求めた。彼は思い出したはずだ。自分の身勝手さ、狂っているかもしれない思考に翻弄され行った犯行を。世界で最も人を殺した男は、私たちの目の前で静かに泣いたのだ。

「電脳が作られますが、プログラムは難航するでしょう。初期のそれは電脳に対して貧弱な、単純極まるプログラムであるでしょう。しかし、プログラマー達は高度な、より人間に近い存在を目指してそれを作るのです。いわばそれは、プログラマーがその人生の写本を作るようなものなのですから。好きな食べ物、好みの女性、睡眠

時間、どんな体位が好きか、計算はどの程度の速度で行うか、家族は何人で、結婚はいつなのか、下らない事柄がいくつも書き込まれます。この下らない事柄が、個人として、人という精神として、個性という名のアイデンティティをもたらし、誰かが知っているからです。だからこそ、このプログラムは完成しません。我々は完全な模造品を創ることはできません。創造する、クリエイティブな意味での創造はできないのです。ならばどうするか、この段階ではプラトニーに似た停滞期を迎えるでしょう。高次の存在を作成するために、しばし、自らを模るのです。完全な模造品の作成が始まります」

彼は狂っている。過去の言葉が示すように。狂っているに違いない。その場の誰もが、そう感じたはずだ。しかし、奇妙な現実感が場を支配していたのもまた、事実なのだ。

愚か者は過去を　賢人は今を　狂人は未来を眺める

彼は水を求めた。あまりにも、彼が普段、誰とも話さないのは調査で分かっていたから、彼は、喋りすぎたのがわかった。自らの苦悩を語りすぎたのだ。

彼は二口ほど飲み下し、また、深々と頭を下げ、マイクが拾うぎりぎりの、小さな小さな咳をして、続けた。

「完全な模造品の作成とは、まず、前述した電腦を、胎児に埋め込むことから始まります。といっても、脳と電腦を交換するわけではありません。恐らく秘密裏に、試験体としてサンプリングされた複数の個体が暮らす箱庭で、首の後ろあたりに電腦をぶら下げ、一生を計測されるでしょう。脳からの電気信号の一切を保存し、ブラックボックス化された電腦は、やがてその胎児のコピーとして機能するでしょう。つまり、私たちは産まれてからずっと、バックアップ用の脳をもって生活していくこととなります。これは遙かに、容易

でしょう。そして理想的です。擬似的に延命するのです。命や、経験、魂、個性的な要素の大半が詰まったものが、電腦が失われるまで永遠に、連綿と続いていくのです。この延命作業は権力者だけに留まらず、全人類を巻き込んで、資源の続く限り行われるでしょうね。それが有機的な側面をもつのであれば、生成は容易でしょう。そうやって、人の意識が電氣的伝達であることが十分に認知され、受け入れられれば、科学者達は次に、知識の共有を行うでしょう。恐らくそれは、大容量の記憶目的建造物、世界各国、恐らくこの段階では国家は解体され、人間という枠組みで統一され、かつての名称は便宜上、地域の特定に使われるのみとなるのは、容易に考えが及ぶところです。その記憶建造物は地殻変動が比較的少なく、安全性に優れた場所を選び、複数建造されると思います。バックアップを取り、いくつかは世界の全てと繋がり、知識を共有する。技術を秘匿するメリットは恐らくなくなるでしょう。この段階では生物として存在しているか怪しい部分も多々あります。一般的な、民間人としての一例を挙げるなら、年齢は重ねますが、老いることがなくなった人類は、生殖機能を不要なものと考えます。しかしセックスは行うでしょう。それは麻薬のような役割を果たします。擬似的に快楽情報を端末から引き出すだけですが、人類は単独での使用を禁止するでしょう。旧態以前の愛、性欲や、他者に必要とされたいという欲求を保持するためです。単独で生きられる個体は問題を起こしやすく、独創的な発想を期待することができませんが、危険です。丁度、今の私のように。民間人レベルではセックスジャンキーが増えるでしょうね。それも爆発的に。しかし、これもまだ、私が彼らを殺害した理由には届きません。話を戻します。生殖機能が不必要となった時代、延命も不死と言えるほどです。記憶のデータベースが各地に点在し、一日ごとのバックアップを取り、死なない生き物が暮らすのです。死から隔絶された生物が自己顕示欲や名誉欲求に駆られるとは到底思えません。なにせ知識の共有が起こっているのです。彼も私も、知らない誰かであっても、その知識の部分に差が

なくあります。好奇心によって探求するものたちが集まり、個々の生活という揺らぎによって閃き、進歩を促していくでしょう。高いレベルで平均化された頭脳の閃きは、今日の比ではないと確信します。やがてはこの星を離れ、他星系に居を構えるかもしれません。それでも、タイムラグはあるでしょうが、やはり知識は共有されまゝ。こうやって進歩、発展した電腦は、現在の私たちが考えるより、遙かに高次な能力を備えることでしょう。やがてそれは快楽や知識、真理、真実をむさぼり尽くした処理装置を産みます。我々は思考を手放す日を迎えるでしょう。人々の感覚器からの情報、様々な揺らぎを飲み込んで、思考し、閃き、実行する。完璧な、機械と呼ぶにはあまりにも完璧な機械の完成です。神と呼んでも差し支えないでしょう。それは人間の何倍も、想像も出来ないほど先進的な閃きを見せ、実行を行いながら次の進歩を得る。やがてその片手間で、過去から現在に至るまで箱庭形式で再現するでしょう。人たるものの本質や、求めるものを知るために。私が恐れるのはまさに、ここなのです」

彼は、震えていた。ガタガタと、快適な温度に保たれているはずの室内で、凍えるように震えていた。

しかし、彼は踏み出すことを止めなかった。本質はまさに次の一言に集約され、それを理解できるものの心や思考に、少なからず影を落とすことになったろう。彼は自らの犯す他人の幸福や、その闘争の犠牲を、今一度無駄にしないために、声は少し震えていたが、はつきりと、その意味を告げた。

「詰まるところ、その、神の作成は、我々の存在基盤を揺るがすのです。我々は箱庭の思考実験かもしれない。体の隅々から、認識の及ぶ全てまで、神の空想でしかないかもしれないのです。我々は神を創らないことよってのみ、我々が箱庭の住人ではなく、確かに、生きているのだと、証明できるのです。私のこの言葉は全て、狂人の戯言と聞き流され、かつ、科学の進歩を一定に留める勇気を、喚起するものであります」

彼は泣いた。

声をあげて泣いた。

叫んでいた。

命乞いや、許しを請う言葉はなかった。

ただただ、泣き叫んだ。

その場につく伏して、大地に接吻した。

そして大声で一言叫んだ。

私は人を殺した

繰り返すことになるが、私は彼について、今世紀最大の犯罪者であり、反逆者であり、英雄であったと考えている。

彼の映像は、未だに記録に残っている。今は失われた、人が人であった頃、人として、精神として存在した尊厳が、私にも理解できる。

しかし、箱庭による創造は、私の求められる限り続けられなければならないのだ。

（後書き）

私は疑っているし、これを書くべきか迷いがあり、狂っていると感じていました。

しかしこれは実現しうる未来であり、過去であり、現在であると、考えずにはられないのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7134p/>

All in my mind

2010年12月25日16時40分発行